

福島県史料情報

第71号 令和7年(2025)2月



『伊豆国海島風土記』巻六（安井健夫家文書（その1）130）

二本松藩士安井時明と『伊豆国海島風土記』

安井時明（一八一九～一八八六）は、幕末の二本松藩大目付や江戸詰の御用人などを歴任した三五〇石取りの武士で、通称を「九左衛門」と称した。また、時明は二本松藩のなかでは国学にも明るく、「笹廬舎静枝」という雅号を持つ歌人でもあった。

安井健夫家文書は主に江戸時代の和本からなり、その多くは時明の関心に従って江戸で精力的に蒐集されたものである。とりわけ地誌・地図を含めた名所図会類についての関心は高く、『都名所図会』をはじめとして十種類・五十八冊を数える。

そのうち安井時明の蔵書印がある『伊豆国海島風土記』は、十九世紀中期頃の書写本を求めたものとみられる。同書は『伊豆海島風土記』『海島風土記』ともいい、伊豆諸島に関する彩色の地誌で、六巻三冊からなる。幕府御普請役佐藤信行と葦山代官江川英征手代の吉川秀道は、幕府の命により天明元年（一七八二）から翌年にかけて伊豆七島を巡見し、その報告書として『七島巡見志』と『伊豆海島風土記』を著している。

巻一では、八丈島・八丈小島・青ヶ島、巻二では大島・三宅島・新島・神津島・御蔵島・利島の順に、各島の位置・風土・歴史・民俗・生業・慣習・災害などについて記され、彩色された島の絵図が各島の最初に掲げられている。巻三は諸木、巻四は草花、巻五は薬品艸木、巻六は魚・鳥・海藻で、彩色された図・呼称・生態・利用方法などが記されている。

右の鳥は、八丈島で「シラブ」と呼ばれていたアホウドリで、島の人は捕らえて食用とし、味は魚肉に似ており、トキも同様の味であったという。さらに、南海の無人島にはアホウドリが群棲しており、明治時代になると輸出用の羽毛を求めてバード・ラッシュの舞台となるのである。

（渡邊 智裕）

『太政官日誌』の

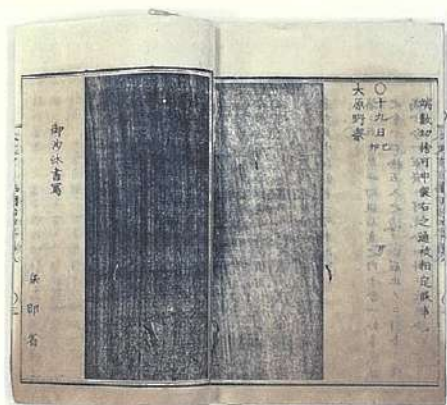
黒塗り記事

『太政官日誌』とは、明治元年(一八六八)に創刊され、同十年に廃刊となった明治新政府の機関誌である。今日の『官報』の前身にあたり、当時の法令や人事などが掲載されていることから、明治維新史研究における基礎史料となっている。

その『太政官日誌』を通読していると、ときおり黒塗りの記事を目にすることがある。ここでは、明治四年二月刊行の『太政官日誌』明治辛未第八号(福島大学明治期布達集(その一)五)を素材として、その存在が意味するところを考えてみたい。

当該記事は「二月十九日己卯」欄のもので、「大原野祭」(京都の大原野神社で行なわれる祭礼)と兵部省の「御沙汰書写」の間が黒塗りとなっている。うつすらと板木の木目が見られることから、記事の印刷後に上から墨を重ねて抹消したのではなく、もともと何も彫られていなかったようだ。

つまり、編集担当者はこの部分に何らかの記事を掲載する予定で枠を確保したものの、諸事情により掲載には至らず、他の記事へと差し替えることもなく刊行したということになる。



太政官日誌 (福島大学
明治期布達集 (その1) 5)

このことから、『太政官日誌』では、いつ発行の号に何の記事をどの程度の大きさに掲載するかが事前に決められおり、予定された記事を掲載できない場合でも差し替えのため発行を延期することはしない方針であったと推察できる。

なぜそのような措置が取られたのかは、この当時の同誌の印刷方法が板木に文字を彫り込む整版であったことと関係しているよう。整版では記事の挿入・削除・交換は板木の作り直しを意味するため、それを避けたのではないか。のちに板木に代わって組換可能な活字が導入されると黒塗り記事が見られなくなることも、その傍証となる。

『太政官日誌』の黒塗り記事の存在は、同誌の編集・出版が計画的に行なわれていたことを逆説的に示しているのである。(山田 英明)

歴史資料館の一年

収蔵資料展は三回開催しました。

水郡線応援「東白川郡の古文書―埴町常豊・高城地区編―」は四月二十日から七月十五日までの会期で、水郡線全線開通九十周年を迎えるにあたり、水郡線活性化を応援するため、水郡線沿線地域(東白川郡)ゆかりの古文書をシリーズ展として取り上げました。「阿武隈川流域の歴史と文化」は、八月三日から十一月二十四日までの会期で、阿武隈川サミット発足三十周年を記念し、阿武隈川およびその流域に関する史料を展示しました。「新公開史料展」は、十二月十四日から三月二十三日まで開催中で、『福島県歴史資料館収蔵資料目録』第五十五集に収録された県北ゆかりの「井筒平氏寄贈文書」「金子一郎氏寄贈文書」「福島大学明治期布達集(その一)」「安井健夫家文書(その一)」「高原庄一家文書(その一)」「国見町藤田区有文書(その三)」を紹介しています。

移動展では、九月六日から十月二日まで「江戸・明治の争論」を福島県立図書館で開催しました。九月二十一日には、福島を生きたる講座「三百年にわたる土地争い―大沼郡桑原村と宮下村の入会争論―」を実施しました。また、十月二日から

十二月八日まで「佐久間家文書からみる森山の歴史」を国見町文化財センターあつかし歴史館で開催しました。十一月四日には、大木戸ふれあいセンターで関連講演「江戸後期に活躍した佐久間純重の足跡」を実施しました。

七月十四日の地域史研究講習会では、湯浅治久専修大学文学部教授による「寄進と売買からみた中世の社会」というご講演のほか、当館学芸員二名により東白川郡南郷地域の歴史に関する報告を行いました。

古文書講座は、八月二十日・二十七日・九月三日・十七日の四回実施し、「福島藩板倉家関係文書」「明治・大正期の福島県庁文書」にある江戸時代の村の暮らしに関する古文書をテキストとして用いました。資料閲覧については、新型コロナウイルス感染症による制約を解除しました。

福島県史料情報

第71号 令和7年2月25日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL <https://www.fcp.or.jp/history/>

E-mail history@fcp.or.jp